

嬉野の緑茶の栽培と収穫

茶草（カメリア・シネンシス）は、常緑のセキセイ科に属し、一年中葉を茂らせています。そのため、お茶を淹れるのに適した茶葉を作る工程も一年を通して行われています。

夏から冬まで

第一段階は 8 月に始まり、翌年の豊作のためのメンテナンス期間を設けます。土壌の状態を確認し、お茶の栽培に適した状態に戻します。土壌に必要な栄養分を吸収させるために肥料を与えたり、前回の収穫の影響を受けた部分を耕して土壌をほぐし、空気を入れます。また、虫や病気の影響を抑えるための作業も行い、次の年に新茶の親葉を育てることができるようにします。

9 月には葉の状態を観察し、葉が傷まないように剪定します。10 月に入って気温が 18～19℃まで下がると、さらに「秋の剪定」が行われます。お茶の品質を保つためには、このタイミングが重要なのです。

11 月に入って気温がさらに下がると、冬の寒さから根を守るための作業が行われます。一般的な方法は、近所の水田で収穫したばかりの稲わらをしっかりと絞って、土と根を覆うことです。稲わらは雑草の抑制や土壌の保水にも役立ちます。

また、冬は生産者にとって、それぞれの茶樹の長期的な展望を考える機会でもあります。茶は通常、苗が成長し始めてから 4 年後に最初に収穫されます。通常、7 年目から 10 年目にかけて安定した収量が得られます。植物が年々背丈が高くなってくると、5 年に 1 度、発芽を促すために地面から 30～50cm 程度の高さの幹の部分で刈り込みを行います。樹齢 35 年以上の植物は植え替えを行います。

一番茶の準備

"春の剪定"は、お茶（一番茶）の初収穫に備えて2月から始まります。これは、収穫時に古い茶葉と新鮮な茶葉が混ざらないようにするためです。3月に入って気温が上がり始めると、新芽が出始めます。その時期は場所によって異なりますが、農家の人たちは畑の様子を見ながら新芽が出ているかどうかをチェックします。畑の周りには小さな扇風機を設置して空気を循環させ、気温が下がっても霜害を防ぐようにします。苗は、新しい植物を育てるために専用の畑に植えられています。

4月下旬になると、初収穫に向けて茶葉を加工する機械の点検が行われます。農園によって時期は異なりますが、茶葉が開き始めます。収穫の10日前には黒い網をかけます。これにより、農家は日照量を調整し、お茶の緑の色を濃くして風味を高めることができます。肥料を土に与えます。

一、二、三回目の収穫

嬉野の初収穫は、伝統的に5月上旬がピークとされています。収穫した茶葉はすぐに品質が落ちてしまうため、すぐに加工しなければなりません。摘み取りと加工のサイクルを数時間おきに繰り返すことで、茶葉の鮮度を保つことができます。嬉野の茶園は標高差があるため、無駄を省きながら高品質のお茶を生産するためには、タイミングが重要になります。この段階で不健康だと判断された場合は、根こそぎにすることもあります。

2回目の収穫は、通常6月中旬から7月上旬に予定されています。1回目の収穫と同様に、茶葉に黒い網をかけて日照量を調整します。また、葉を摘むタイミングにも気を配ります。この収穫した葉は、紅茶だけでなく緑茶にも使用されます。背の高い茶木は、害虫の被害を最小限に抑えるために、この時期に剪定を行います。

7月下旬から8月中旬にかけて、3回目の収穫が行われます。それが完了すると嬉野のお茶の季節が終わり、サイクルは翌年の収穫のために再び開始されます。